# 幼児の描画表現に関する縦断的研究（Ⅰ）

## 人物画・模写画の発達と類型化による検討

研究第6部　神田久男・吉川政夫
権平俊子・山本清恵
柴田良一
城北幼稚園　山田正子

### Ⅰ　はじめに

幼児の描いた絵を見ると，われわれはいつもその一見単純な構成の中に，何か言い知れぬ魅力と感動を覚えるものである。それは，一面では幼児の知覚・認知能力や視覚―運動の協応能力など，著しい知的発達が反映されているからであろうが，反面，そこには大きな生命力に動かされた，すばらしいイメージに富む子どもの内的世界が映し出されているからだとも言える。

これまでにも，幼児の描画活動の発達過程を明らかにするために，幼児の描画を年齢別に分類して見ていくことにより，それぞれの発達年齢によって共通した様式・傾向のあることが多くの研究によって見い出されている。しかし，幼児一人一人の発達過程に観点を置いた場合，自由画，模写画，課題画など，描画のあらゆる側面がすべて同じレベルで平行して発達するとは言いがたく，個人差が認められる。そこでわれわれは，いくつかの角度から描画条件を設定し，それぞれの発達過程を縦断的に研究することにより，幼児の描画活動の発達の諸相を有機的，包括的にとらえようとするものである。したがって，本研究の一年目に当たる今年度は，外界の対象をイメージ化したものの描画表現である人物画と，眼前に存在する対象の知覚的描画表現である模写画との，各年齢別発達とその相互関連性を数量的，事例研究的にとらえることにより，今後の縦断的研究の指針とすることを目的としている。

### Ⅱ　人物画と模写画の発達と相互の関連性

#### 1．目　的

描画表現は非言語性の表現活動である。情動表現とことばを伝達手段としていた幼児は，描画表現という新しい伝達手段を獲得すると，それをつかって自己の精神生活を好んで表現するようになる。幼児期はあらゆる発達段階の中で描画表現が最も活発な時期であるために，描画を利用して，幼児のパーソナリティや知的発達を検討する試みがかなり行なわれている。

その描画表現の発達過程は，3歳ころまでの「錯画」あるいは「なぐりがき」の時期，4歳から7歳ころまでの概念画（図式画，象徴画）期，それ以後の写実画期に分けられる。

描画による表現活動は，1歳から1歳半ごろ開始されるが，錯画やなぐりがきと呼ばれる初期の描画活動は，最初，手の運動そのものが先行し，その描線はコントロールされていない。この時期の子どもは，まだ対象を形態的に表現しようとする目的意識をもっておらず，描画活動は，擬声音や身振りをともなった未分化な線画の遊びである。

最初の閉じた図形を描き出す2歳をすぎ，3歳ころになると，幼児は円とその他の線との組み合わせから実に多くのものを表現するようになる。幼児は，人，動物，怪獣，食物など，自分がイメージするものを円図形などで表わすことが多い。最初単独の円だけであったものが次第に複数の円を描き出し，大きな円が小さな円を囲んだりする組み立てから，人の顔が描出されるようになる。

以上のような発達過程の次に，表現が一つの型に陥り，きまりきった形をくり返し描く時期がくる。この時期になると，幼児は，人間はこうすればかける，チューリップのかき方はこうすればよいというように，図形を覚えてその様式をくり返すことが多い。このパターン化された，いわゆるステレオタイプの絵をふつう概念画とか図式画と呼ぶ。この概念画期では，たとえば，「私を描いて下さい」といって，人物の模写や写生を指示しても，とくに目立った特徴，たとえば，メガネをかけているようなこと以外は，その子がその時期に描出している人物像と同じような絵が描出されるのが普通である。ある特定の人物を模写した時に，いくつかの特徴をおさえて描出可能になるのは，学齢期に入って以降の写実画期である。

描画の発達過程を簡単に述べたが，今回の研究の対象は，3歳から6歳の幼稚園児であり，描画の発達区分からすると，錯画期と写実期にはさまれた概念画期に位置する。この年齢は，認知の発達では，ピアジェの表現を借りると，感覚運動的段階から具体的操作段階への移行期にあたり，象徴的思考あるいは直観的思考の段階と呼ばれている。

そのような発達段階にある幼児の描画表現に関わる要因には，知覚・認知能力や視覚―運動系の協応能力などが主にあげられる。今回の研究では，それらの能力を使って描かれた人物画と模写画との相互比較を行なうことにより，幼児の内面にとり込まれ，処理され，保持されている外界のイメージに基づく描画表現（人物画が該当する）と眼の前に存在する対象の知覚に基づく描画表現（模写画が該当する）との発達的な関連性を明らかにしようと試みた。

## 2．方　法

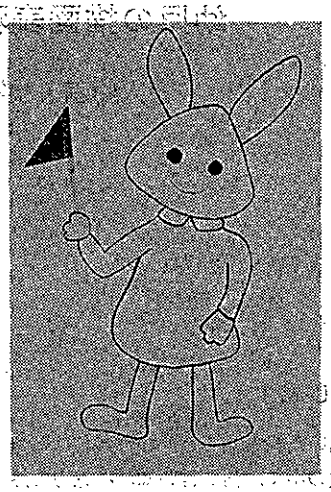
1）被験者　東京都内の幼稚園の年少児51名（平均年齢4：1），年中児156名（同，5：1），年長児174名（同，6：0）の計381名。

2）手続　描画課題は，①人物画，②樹木画，③家，木，人，太陽を画用紙に同時に描き込む画，④模写画の4課題。

それらの描画課題は，クラス担任により各クラス小集団ごとに実施された。その際，園児たちがお互いの描画を観察しあわないよう配慮した。なお，今回はその中から，人物画と模写画について報告する。

人物画は，「人を描い下さい。だれでもいいですよ」と教示した。模写画については，「みなさんの眼の前にある絵をよく見て，なるべく絵と同じようにかいて下さい」と教示した。模写対象として用いた刺激図は，擬人化して描かれたウサギである（第1図）。被験者が幼児であること，集団での実施であること，人物画との比較をする上で人物とあまりかけはなれない刺激図であることを考慮して，幼児の興味をひき，絵が大きくてわかりやすく，適度に複雑な模写対象の条件を満たすウサギの図を使った。図は彩色されている。描画用具は，人物画がB―2の鉛筆，模写画がクレパス，用紙はB4の画用紙を使った。時間制限は特にしなかった。園児の質問に対しては，「あなたの好きなように描いて下さい」（人物画），「絵をよく見て同じようにかいて下さい」（模写画）と強調し，園児がなるべく自由に描画できるように促した。なお，実施時期は，1980年10月である。

第1図



## 3．結果と考察

1）人物画の描画対象　幼児たちは人物画に誰を描いたかを整理した結果が第1表である。

第1表　人物画の描画対象　（　）内は％

| 対象児＼描画内容 | | 描出人物の性別 同性 | 異性 | 両性 | 性別不明 | 描出人数 単数 | 複数 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 年少 (N＝51 平均年齢 4：1) | 男 | 0（0） | 0（0） | 0（0） | 30（100） | 26（87.0） | 4（13.0） |
| | 女 | 2（9.5） | 0（0） | 0（0） | 19（90.5） | 16（76.2） | 5（23.8） |
| | 全体 | 2（4.0） | 0（0） | 0（0） | 49（96.0） | 42（82.4） | 9（17.6） |
| 年中 (N＝156 〃 5：1) | 男 | 24（30.8） | 3（3.8） | 0（0） | 51（65.4） | 63（80.8） | 15（19.2） |
| | 女 | 54（69.2） | 2（2.6） | 4（5.1） | 18（23.1） | 49（62.8） | 29（37.2） |
| | 全体 | 78（50.0） | 5（3.2） | 4（2.6） | 69（44.2） | 112（71.8） | 44（28.2） |
| 年長 (N＝174 〃 6：0) | 男 | 71（79.8） | 7（7.9） | 8（9.0） | 3（3.3） | 69（77.5） | 20（22.5） |
| | 女 | 78（91.7） | 0（0） | 5（5.9） | 2（2.4） | 41（48.2） | 44（51.8） |
| | 全体 | 149（85.6） | 7（4.0） | 13（7.5） | 5（2.9） | 110（63.2） | 64（36.8） |

年少児の場合，男児も女児も，描いた人物の男女の区別ができない不明な絵をかいたものが96%で，2名の女児だけが同性の女の子を描いている。

年中児になると，女児の69.2%が同性を描き，異性の男の子を描いたものは2.6%である。男と女の両性を同時に描いた女児が5.1%，不明な絵は23.1%と年少児に比べて激減している。男児の場合は，女児よりも同性を描く比率は低く，30.8%が同性の男の子を描いている。異性を描いた子どもは3.8%，両性を同時に描いた子どもは一人もおらず，性の区別がはっきりしない不明が65.4%である。

年長児になると，男児が男を描く率が全体の79.8%と急増し，人物表現における性の分化が明確化してくる。女児も同性を描く率が全体の91.7%と，そのほとんどが自分の属する性を描画対象として表現している。モチーフとして描かれている内容は，女児では，母親などの女性よりも，同年齢の女の子か，自分よりも年上のおねえさん風の女の子が多い。女児で異性を描いた子は一人もいない。逆に，男児では，異性である女性（母親とおぼしき対象が多い）を描いた子が7.9%いる。女児も異性である父親を描いても不思議ではないと考えられるが，そのようなケースはなく，この年齢の子どもにとっての父親と母親の意味をかいまみるようで興味を引かれる。両性を描いた率は，女児で5.9%，男児で9%。不明はほとんどなく，女児で2.4%，男児で3.3%である。

総じて，女児の方が男児よりも自分の属する性を人物画のモチーフとしてはっきり表現する時期も早いし，その率も相対的に高い。結果から，子どもの大部分が，描画において性の明確な表現が可能になる時期は6歳ころといえよう。

また，描かれた人物の数を調べると，年少児では，単数の場合が82.4%，複数が17.6%である。年中児では，単数が71.8%，複数が28.2%，年長児では，単数63.2%，複数36.8%と，年齢とともに2人以上を描く場合が増えている。男児よりも女児に複数の人物を描く率が高く，女児の描画では，洋服の柄をかえたり，リボンやボタンなどの装飾表現に手を加えたりして，2人から4人が多くの場合描かれていた。

以上の結果は，女の子はより好んで女子像を描出し，その作品が男の子よりも明細化が進んでいるというハリス（Harris, D.B. 1963）の指摘と一致している。

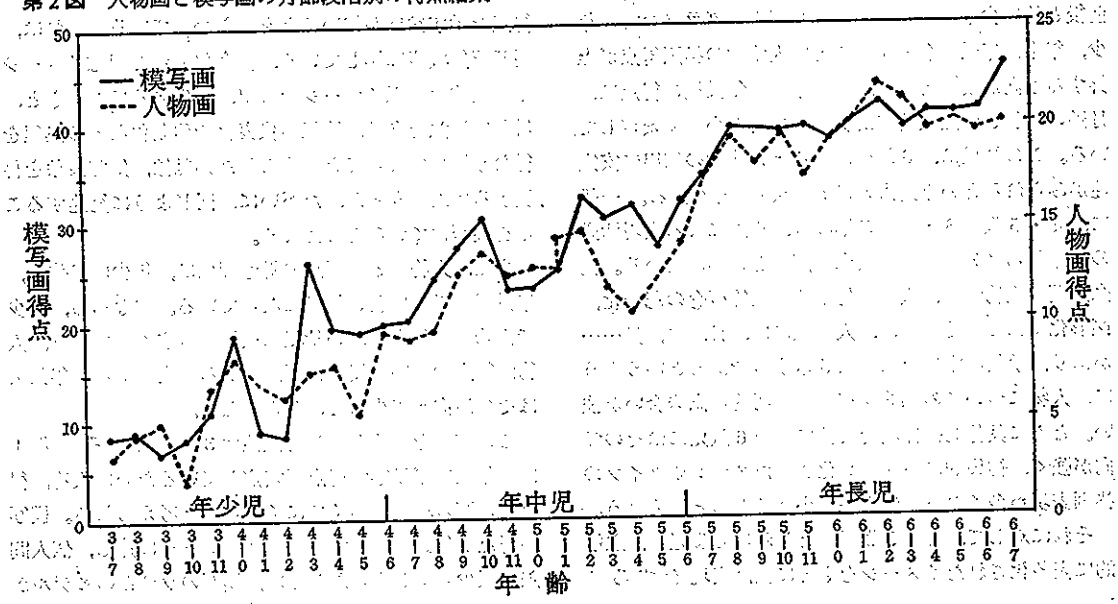
次に，人物画と模写画の発達的変化についてみていこう。

2) 結果の得点化　結果の整理として，まず両画を得点

第2表　人物画と模写画の得点結果

| 年齢区分 ＼ 描画の区分 | | 人物画 | 模写画 |
|---|---|---|---|
| 年　少 (N = 51 平均年齢 4：1) | 平均 | 6.27 | 14.10 |
| | SD | 3.70 | 9.98 |
| 年　中 (N = 156 〃 5：1) | 平均 | 12.76 | 27.90 |
| | SD | 5.12 | 11.10 |
| 年　長 (N = 174 〃 6：0) | 平均 | 19.37 | 39.96 |
| | SD | 4.75 | 6.39 |

第2図　人物画と模写画の月齢段階別の得点結果



化した。人物画については，グッドイナフ人物画知能検査（小林・小野改訂版）の得点表を得点化の基準として用いた。模写画については，得点化するための評価基準表を作成した。作成にあたっては，グッドイナフの得点化の方法を基本としてとり入れた。評価項目は，ウサギの部分である耳，顔，脚，腕など計10項目である。得点表は，形態（たとえば耳の形，大きさ，位置，輪郭線）と色彩（モデルのウサギと同じ彩色がほどこされているか否か）から各項目の評価をするようにつくられている。得点の配分は，形態30点，色彩18点，計48点である。

両画の得点評価の方法は，基本的には一致しているが，形態のみを評価する人物画とちがい，模写画の場合は，色彩も評価得点に加えられているのが特徴である。

以上の評価基準に基づき，年齢段階別に人物画と模写画の平均得点を表わした結果が第2表である。第2図は月齢段階別にグラフ化した結果である。

3) 人物画　年齢段階別の結果は，グッドイナフ人物画知能検査の平均的発達水準とほぼ対応している。すなわち，年少児（平均年齢4：1）の平均得点6.27は，人物画知能検査のMA換算表でMA3：10～4：1の間にあり，年中児（同5：1）の平均得点12.76は，MA5：1～5：7に対応する。ただし，年長児（同6：0）の平均得点19.37は，MA6：9～6：11の間で平均的発達水準を多少上まわっている（IQにすると平均で10位高い）。第1図の月齢段階別のグラフで見ると，かなり上下の変動があるように見えるが，これは，各月齢のサンプル数が少ないためである。年長・年中児の各月齢における平均サンプル数は15名前後であるが，年少児は5名前後と特に少なかった。しかしながら，グラフから，年少，年中，年長の各stageごとに人物画の描画得点が上昇する傾向が読みとれる。その中で，年長児の得点は，月齢の増加とは比較的無関係で，変動が小さく安定している。この結果は，6歳児になると人物画の描出に安定性がみられるという過去の研究結果と一致する。一般に，4・5歳～6・7歳の期間は，描画による表現活動の発達段階区分では，「概念画期」といわれている。概念画期の人物画は，人物に対する一般的概念の記号化，図形化である。そこでは，人の顔には，目，口，鼻……があり，手足の指はそれぞれ5本ずつであるというように，人物についての知的レベルの説明的な意味合いが強い。とくに具体的操作期を目前にした6歳児にはその傾向が強く，結果的にパターン化されたステレオタイプの描画表現が多くなり，個人差も小さくなるといえよう。

それに対して，4・5歳児，とりわけ4歳児は，主観的に表象化されたイメージをもとに描画表現をすること，および，全身像を描かないで顔だけを描く子どもがいることなどの理由から，人物画の得点が相対的に低くなっている。反面，4・5歳児の描画には，画一化の程度が低いために，6歳児に比べると生き生きした表現が目立っていた。

4) 模写画　人物画と同様に，模写画においても，年少14.10，年中27.90，年長39.96と模写得点が伸び，各年齢段階に対応した発達がみられた。中でも年長児の得点は，年少・年中に比べると分散が小さく安定している。それに比べると，年少・年中は相対的に分散が大きく，個人間に差があることがうかがえる。しかしながら，全体的にみると，模写画の結果は，人物画の描画表現における発達のパターンと類似しているといえよう。

ところで，色彩水準と形態水準の発達的変化についてみると，年少では，総合得点に占める色彩水準の得点が相対的に高く，年長ほど両カテゴリーの水準がともに高得点であった。形態は的確だが彩色がモデルの色と一致しない表現をしている例は，各年齢段階をとおしてみられたけれども，色彩をまったく無視して描画している例はほとんどみられなかった。結果から，年齢が進むにつれ，幼児は形態と色彩の両カテゴリーに対して同等の注意を向けるようになり，知覚対象を正しく描出するようになるといえる。

5) 人物画と模写画の関連性　ところで，各年齢段階ごとに，人物画得点と模写画得点との相関係数を求めると，年少 $r=.59$，年中 $r=.50$，年長 $r=.38$ である。この結果は，両画間において，一方が高得点の幼児は他方の得点も高く，逆に，低得点の幼児はもう一方も低い得点を示す傾向が強いことをあらわしている。これは，同じ認知機能に属している，概念化された記憶イメージや視覚的な記憶イメージを抽出，再生するはたらきと，対象に注意を向け，情報の代表化や体制化などの処理を行なう観察によってとらえられた知覚像，知覚表象を再現するはたらきとか，たがいに，同じように発達することを裏づけていると言えよう。

また，人物画と模写画の対応関係は，年少ほど強く，年長が相対的に弱い結果になっている。すなわち，年少で人物画の得点が高い幼児は模写画もすぐれており，人物画得点の低い幼児は模写画も劣る傾向がある。年長ではその傾向が年少ほどはみられない。

この結果を説明しうる可能性は3つある。その第1は，年長ほど模写画得点が安定しているために人物画得点との間の相関が高くでにくかったと考えられる。模写画得点が年長児の月齢間で一応プラトーに達し，個人間差が減少してしまったことは，模写のウサギのモデルが

年長児にとって比較的易しかったためもあり，もう少しむずかしい刺激図を使った場合はどうなるかを検討してみる余地が残された。

その第2は，たとえば，創作画は得意だけれども模写表現は不得意，又はその逆の場合などのケースのように，イメージや創造的機能をつかって描画することが好きで得意な子どもと，対象を観察して描くことが好きな子どもの個性が，年長になるとはっきり出てくるために，年長児全体の相関が低くなったとも考えられる。

その第3は次のようである。描画表現に関する要因は，主として，①知覚・認知能力と②視覚一運動系の協応動作による表現能力の2つである。今ここで，②の能力が各幼児の個人内で人物画と模写画について同じように働いているとみなせば，上述の結果から，イメージに基づく認知のはたらきと知覚のはたらきとの間に，年少ほど個人内差が少ないと考えられる。つまり，イメージの概念化が進んでいる幼児（人物画知能検査の解釈をあてはめれば，知能が高い幼児）ほど対象知覚の能力も発達している。その逆の幼児は，対象知覚の能力も遅れてしまうといえる。ところが，年長児においては，イメージのはたらきと知覚のはたらきとの間に分化が生じる結果，個人内で両者がアンバランスになるケースもみられ，それが結果的に両画の関連性を低める作用をしているとも考えられる。

なお，人物画と模写画の具体的な関連性については，次のⅢで詳しく言及する。

## Ⅲ　類型化による事例研究

### 1．目　　的

これまでは，幼児の描画の発達過程を人物画と模写画を中心にとらえてきたわけであるが，幼児一人一人の人物画と模写画を比較してみると，そこには全体としてのまとまりや構造化の程度，あるいは基本的な図形のパタンなどにおいて，必ずしも両描画間に共通した傾向が認められるとは限らない。描画の際の課題条件や描画対象，あるいはまた，子どもの経験，興味，心理的状態，描画技術などさまざまな条件によって，対象を明確にとらえ比較的概念化されたイメージが再生される場合もあるし，逆に概念化されにくいなまの感情やイメージ，心身のリズムなどが強調されて表現される場合もある。

そこで本研究では，これまで幼児から得られたすべての描画をもとに6つのグループに類型化し，幼稚園で描いた絵や日常行動ともつき合わせて，事例を中心に検討することにより，幼児の描画表現の諸特徴をいくつかの側面から総合的にとらえようとするものである。

### 2．方　　法

**類　型**　幼児一人一人の人物画と模写画を相対的に比較検討し，次の6つの類型に分類した。

Ⓐ人物画≒模写画群　人物画と模写画の得点が共に各年齢別の平均得点にほぼ近似し，両描画間にはアンバランスな傾向が認められないもの。全体の約7割近くがこの群に属する。

Ⓑ人物画＞模写画群　両描画の得点を相対的に比較し，人物画の得点の方が著しく高いもの。

Ⓒ模写画＞人物画群　人物画の得点に比べ，模写画の得点の方が著しく高いもの。

Ⓓ高得点群　両描画共，その得点が年齢別の平均得点よりも著しく高いもの。

Ⓔ低得点群　両描画共，年齢別の平均得点と比べ著しく低いもの。

Ⓕその他　両描画の得点からは特にはっきりした特徴は認められないが，表現された内容から，何らかの心理的，行動的問題が推測されるもの。

尚，分類はあくまでも一人の幼児の描いた2枚の描画の相対比較によるものであり，類型化のための基準となる得点は特に設定していない。

**対象児**　今回研究の対象として抽出された事例は，Ⓑ～Ⓕ群の中から各年齢別にみて，特にその傾向が顕著なもの81例であり，Ⓐ群は対象から除いた。

**分析の資料**　事例の分析にあたって参考にした資料は，人物画と模写画に加え，樹木画，課題画，および各自がこの一年間に幼稚園で描いたすべての描画と，教師による幼児の行動記録表である。また，81例については，後日F式幼児知能検査を集団（6～10人）で実施した。

### 3．結果と考察

各群の人数，および人物画，模写画，IQの平均得点と分散は第3表に示してある。

Ⓑ人物画＞模写画群

この群では主に次の3つの特徴がみられる。まず第1は，直観的思考，自己中心的思考が優位な4～6歳児の描画は図式画・象徴画と呼ばれるように，幼児は描画対象を観念的，知的に純化した形で象徴的に描くために，矩形や円形，三角形や十字形のような，単純な図形の組み合わせになることが多い。したがって，人物画の場合でも，そうした単純図形（ダイアグラム）の組み合わせの上に，服とか頭髪や眉毛，まつ毛，瞳，手足の指などを付け加えることにより高い得点を得ている。しかし，これが模写画になると，模写しようとする対象が，子どものもっている図形パタンに一致している場合には，モ

第3表　各群における描画およびＩＱの平均得点

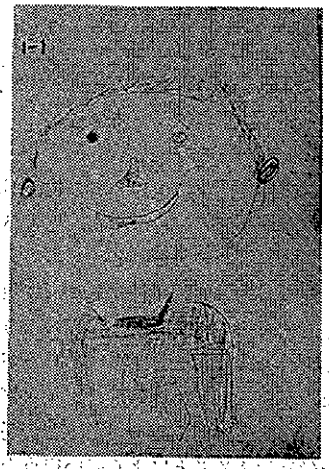
| | クラス（人数） | 人物画 | 模写画 | ＩＱ |
|---|---|---|---|---|
| 1. 人物画＞模写画群 | 年少（0） | — | — | — |
| | 年中（4） | 15.3 | 15.0 | 102.3 |
| | 年長（2） | 19.5 | 33.5 | 85.0 |
| | 全体（6）〔ＳＤ〕 | 16.7〔4.346〕 | 21.2〔11.625〕 | 96.5〔13.733〕 |
| 2. 模写画＞人物画群 | 年少（7） | 3.3 | 22.3 | 98.0 |
| | 年中（2） | 5.5 | 37.0 | ナシ |
| | 年長（3） | 7.8 | 40.6 | 106.7 |
| | 全体（12）〔ＳＤ〕 | 6.2〔3.804〕 | 35.4〔9.596〕 | 104.1〔26.136〕 |
| 3. 高得点群 | 年少（6） | 11.8 | 31.0 | 103.3 |
| | 年中（10） | 19.2 | 42.6 | 101.8 |
| | 年長（8） | 24.5 | 41.1 | 115.9 |
| | 全体（24）〔ＳＤ〕 | 19.1〔5.652〕 | 40.2〔6.807〕 | 107.1〔15.441〕 |
| 4. 低得点群 | 年少（7） | 3.4 | 1.9 | 91.9 |
| | 年中（13） | 6.9 | 15.0 | 81.7 |
| | 年長（6） | 15.5 | 24.5 | 95.7 |
| | 全体（26）〔ＳＤ〕 | 7.9〔6.208〕 | 13.7〔9.973〕 | 87.9〔18.193〕 |
| 5. その他 | 年少（1） | 6.0 | 5.0 | 116.0 |
| | 年中（6） | 11.7 | 27.0 | 86.3 |
| | 年長（6） | 13.5 | 35.7 | 104.0 |
| | 全体（13）〔ＳＤ〕 | 12.1〔3.689〕 | 29.3〔11.027〕 | 96.8〔17.851〕 |

デルの忠実な模写となりうるが，模写しようとする絵の全体なり一部なりが，その子にとって未知のものであったり，既にパタン化された図形とは異なる場合，絵として再生されるのは，モデルの図形を既にパタン化された既存の図形に同化したものであり，しかも手足の指やまつ毛など，細部の描写は人物画から模写画へとは転移しない。（第3－1.2図参照）

2つ目の特徴は，模写すべき対象のもつ要素の内，形態よりも色彩の方に強く反応しているために，模写画の得点が低くなっている場合である。つまり，モデルの色彩の方に注意が強く向いているので，色の対応は正確であっても，形態の方は総じて不明瞭で，正確さに欠けるものができあがってしまう。第4－1.2図にはこの特徴がよく示されている。ただ，人物画については高い得点を得ているので，幼稚園で描いた自由画を見てみると，教師の適切な指導が与えられた絵については，相当構成度の高い絵が描かれている。

もう1つ，幼児の興味の対象や経験の程度が描画に影響を及ぼすことが当然考えられるが，この興味や経験の効果が人物画の得点に反映されるという現象はここでも認められる。幼児の自由画に登場するマンガや怪獣など，人物に類似したテーマの出現頻度が高い子どもは，人物画も細部まで描かれて得点も高くなっている。しかし，これが模写画のように，描く対象が規定されてしまうと，図式的な単純な絵になったり，マンガ化された絵になってしまう。

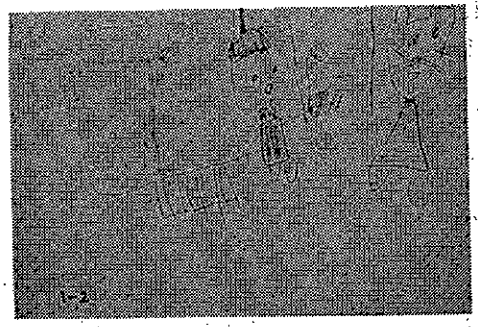
第3－1図



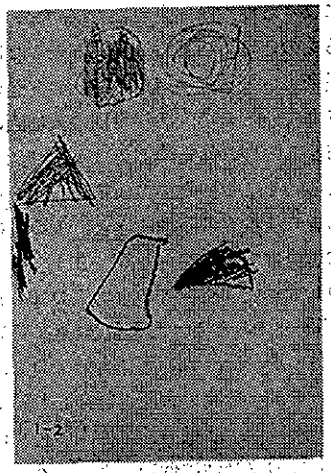
第3－2図

年長組A子の人物画と模写画，人物画は年齢相応の分化がみられるが，模写画の方は，形態はモデルとほぼ対応しているにもかかわらず，色を自分勝手に使用しているために，得点が低くなっている。

第4—1図



第4—2図



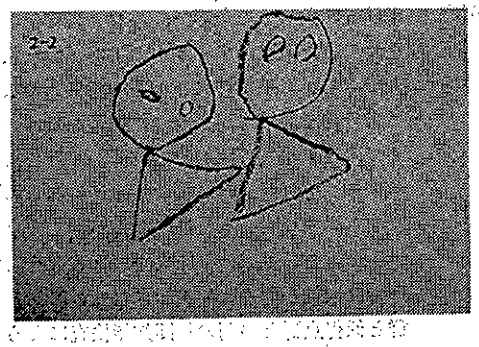
年中組B男の人物画と模写画，人物画はほぼ年齢に近い得点。模写画になると，形態よりも色彩に反応。顔2つのの部分の丸は赤，胴は黄色，足は黒。

◎　模写画＞人物画群

模写対象を正確に描き写すためには，主に幼児の知覚・認知能力や，視覚—運動の協応能力に依存するところが大きい。ただ，模写画といっても，対象をそのまま再生したものではなく，描かれたものは視覚像として心の中で変形，再構成の過程を経た結果であるから，人物画ともそれほどの差異は生じないことが予想される。しかし，この群では模写画に比較して人物画の得点は明からに低い。そこで人物画の特徴をみると，顔だけしか描かれていないもの，衣服や手足の指など，身体のある部分は具体性を備えている反面，全身は図式化されているなど，身体の特定の部分だけをとらえて正確に表現し，他は省略や簡略化している傾向が著しい。

模写画では，それが実物の正確な写しではないにしても，描かれた絵をモデルとは対照し，違いを修正することは容易である。一方，人物画の場合，表現対象は実際眼前になく，頭に浮かべた“人物”という心像を手がかりに表現している。したがって，表現する過程で，対象のさまざまな構成要素の中から特定のものを重視し，選択されて描かれるために，頭だけの部分画であったり，

第5—1図



第5—2図

年少組C男の人物画と模写画。丸い顔に目が2つ，それに三角形の胴がついただけの人物画に比べ，模写画では，モデルを正確に模写しようという努力がうかがわれ，得点も非常に高い。

胴よりも顔の方が大きいといった，全体としての構成がアンバランスになったり，細部表現の省略，ないし簡略化がおきているものと考えられる。（第5－1.2図参照）

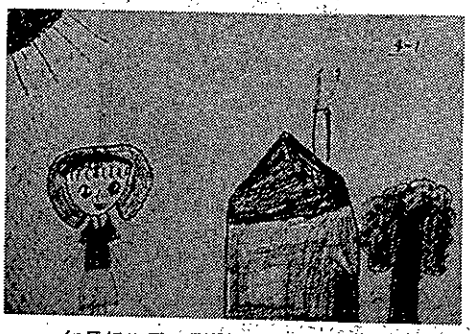
ここで，従来から人物画は幼児の知能の発達の指標としても使用されているので，各年齢別の人物画の平均得点を相当下回るこの群の幼児のＩＱはかなり低くなることが予想される。そこでこの群の人物画の得点を，グッドイナフ人物画知能検査の基準に従い，ＩＱに換算したところ，平均ＩＱは73.4（range 61～91）であった。これをこの群のＦ式幼児知能検査の平均ＩＱ104.1（range 52～139）と比較してみると，およそ30近く低いという結果になる。他の群では，人物画によるＩＱと，知能検査によるＩＱとの間には高い相関が認められることから考えても，この群に関する限り，人物画の得点は，知的発達の指標としての妥当性は低いことになる。

尚，参考までに，この群と前述の人物画の方が顕著に高いⒷ人物画＞模写画群との間には，知能検査によるＩＱに有意差は認められなかった（$t=0.7143$　$df=14$　$p>.4$）。

Ⓓ　高得点群

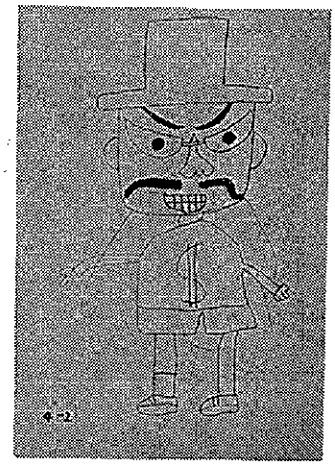
人物画と模写画が共に高い得点を得た幼児は，外界の対象を的確に認知し，それを内面的に構造化し，しかも正確に再生できるだけの知的能力と手の操作を中心とした運動能力が優れていることがうかがえる。こうした傾向は，幼児にとってはやや難しいと思われる課題画において顕著に認められる。人物，樹，家，太陽という4つの対象は，1枚の画用紙という与えられた空間の中にまとまりをもって体制化され，各部分の相対的な大きさや形態，あるいは相互の位置関係などが的確に表現されている（第6図参照）。さらに，幼稚園などで幼児が描いた自由画の中にも，描きたいものが独創的に表現され，内容もバラエティーに富み，日常での経験の豊かさが反映されている（第7図参照）。

第6図



年長組Ｄ子の課題画，全体の構成，まとまりがすばらしい。

第7図



年長組Ｅ男の非常にユニークな人物画。

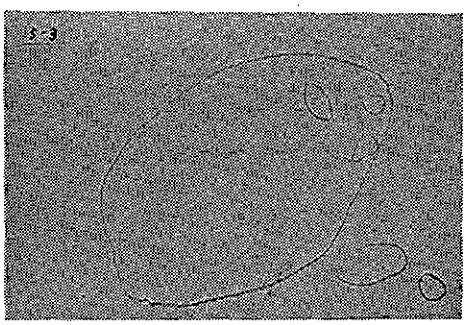
また，今回集められた樹木画一般にも言えることであるが，この群の樹木画も他の描画に比べると，その構成は未分化で，単に矩形の幹に枝がつけ加えられただけというように，非常に単純なものが多く，個人差もあまり見られない。やはり樹木画というのは，日常よく見なれているものではあっても，幹や葉の特徴を正確に把握し，しかも全体としてまとまりのあるものにまで仕上げるには，幼児にとってやや難かしいと思われる。また，従来から言われているように，樹木画には描画者の描画能力はあまり反映されないという点も，個人差があまり見られない一因であると考えられる。

Ⓔ　低得点群

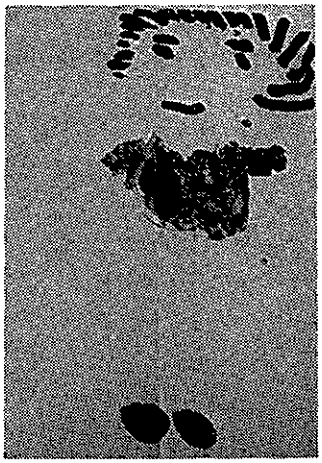
この群では，人物画でも模写画でも，頭は円形，胴は単純な四角形や三角形で，服などの細部は無視されていたり，また顔からすぐ4本の手足が放射状にのびた頭足人で，しかも手足の長さが不均衡であるなど，全体として未分化で稚拙さが目立つ。課題画では，年長児でさえ4つの対象相互の相対的な関係がのみこめず，頭の中にイメージされたものが統一も連絡もなく勝手にバラバラにならべられているために，人が樹や家よりもはるかに大きかったり，家の下に太陽があるなどして，全体が統一されず統合力の欠如が示されている。そこで，高得点群と低得点群との間の集団知能検査によるＩＱの平均を比較したところ，1％水準で有意差が認められた（$t=3.9543$　$df=48$　$p<.01$）。

ただ例外として，この群の中には象徴的，抽象的であるがために，形態が不明瞭で構造が未分化であっても，

第8－1図



第8－2図



年少組F男の人物画と自由画，人物画は雅拙な円型の顔だけであるが，画用紙一面にのびのびと描かれている。その数ケ月後，今度は模造紙に描いた人物の自由画。服は黄緑，スカートは黄，顔と手足には肌色がぬってある。

既存のパタンにはとらわれず，自由でダイナミックな表現をしているものが数例認められた。これらは確かに幼稚で未分化ではあっても，生き生きとした自己表現として感じられるものも少なくなく，豊かで評価すべき内容を多く含んでいる場合がある。従ってこれを低得点群に属するものとして考えるにはやや問題が残る。（第8－1.2 図参照）

Ⓗ その他

上述の4群とは視点が異なるが，激しいなぐり描き，筆圧が弱く画面の隅で小さく萎縮した人物，棒になった人物，真黒な昼間の空など，描画内容から何らかの心理的，行動的な問題が推測される群である。そこで教師による行動記録表とつき合わせてみると，13例中10例までが，1年間を通した行動特徴の最初に，無口で消極的，友達と協調して遊べない，落ちつきがなく多動，登園を嫌がる，などと記載されていた。ただし，本研究では描画を幼児の性格診断として使用するのが目的ではなく，発達に伴う幼稚園や家庭での行動の変化が，描画表現にいかに反映されるかを，今後の縦断的研究により検討していく際の1つのポイントとするにとどめる。

〔参考文献〕


1）M. グッドナウ著：須賀哲夫訳「子どもの絵の世界」サイエンス社

2）R. ケロッグ著：深田尚彦訳「児童画の発達過程」黎明書房

3）G.H.リュケ著：須賀哲夫監訳「子どもの絵」金子書房

4）高橋雅春著：「描画テスト入門―HPTテスト―」文教書院

5）M. Betensky. Self-discovery through self-expression. use of art in psychotherapy with children and adolescents. C.C. Thomas Publisher. 1973.

6）小林重雄：グッドイナフ人物画知能検査・ハンドブック，三京房，1977.

7）長坂陽雄：概念画の発達的機序に関する教育心理学的研究〔Ⅰ〕―絵画論的考察（1）―大妻女子大学家政学部紀要 第14号，99～123，1978.